

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ギリシャ三十年代作家のリレー小説 『四人の物語』に見られる小説技巧
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 22 : 38 - 54
Issue Date	2016-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041555
Right	Copyright (c) 2016 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



現代ギリシャ三十年代作家のリレー小説 『四人の物語』に見られる小説技巧

橘 孝司

1. はじめに

1958年春、すでに七十年以上の歴史を持つ新聞「アクロポリス Ακρόπολις」はギリシャ文学史上でも珍しい試みを企画した。当時既に大家であった四人の小説家たちに、リレー形式で一つの長編小説を書かせようというものである。

四人とは、二つの大戦間に綺羅星のごとく現れた「三十年代作家」と言われる人々のうち、東方出身（いわゆるアイオリス派）のストラティス・ミリヴィリス Στράτης Μυριβήλης とイリヤス・ヴェネジス Ηλίας Βενέζης、中央ギリシャ出身のアンゲロス・テルザキス Άγγελος Τερζάκης と M.カラガツィス Μ. Καραγάτσης である¹⁾。企画したのは、「ギリシャ・ミステリの父」ヤニス・マリς Γιάννης Μαρής だった²⁾。四人の作家は全く事前の協議なしに、前回の担当者が終わらせた部分を受けて順に書き継いでいく。順番は籤で決められた³⁾。

この文学リレー-λογοτεχνική σκυταλοδρομία の試みには大いに興味を惹かれるけれども、何やら遊戯めいた発想であり作家の主義主張が込められた統一性ある作品は期待できない。編集者自身が前書きで、作家たちは当初参加に消極的であったし、完成作品は「断片的な性格 αποσπασματικό του χαρακτήρα」のものであり、「遊戯性と実験性 του παιχνιδιού και του πειραματισμού」の精神を楽しんでほしい、と述べている (p.10)。ところが、読者には受けがよく、二十年後の1979年にはエスティア Εστία 社から書籍出版され、2009年には19刷を数えている。作品名の募集コンテストが行われた際には四千二百人を超える読者からの応募があった⁴⁾。つまり新聞の連載小説としては大成功であり、その勢いで1981年にはテレビドラマ化もされている⁵⁾。

本稿では、この特異な小説「四人の物語 *To Mythistoriema ton tessaron*」(Eστία, 1980²)の何が読者を魅了したのかを、作品の構造分析を通して解明してみたい。通常の作品の底に流れる一貫した思想ではなく、他の担当者の設定や伏線を或いは採用し、或いは無視しながら、どのような物語を紡いでいったのか、という作家の間の駆け引きを探るということである。その特性の故に、四人の三十年代代表作家の技巧の舞台裏を覗き見る機会を与えてくれると思われる⁶⁾。

2. 四人のプロフィール

四作家とも三十年代前後に処女作を発表し、五十年代には代表作がすでに出版そろった大家になっている。年齢順に並べると、

ストラティス・ミリヴィリス (1892-1969) 「四人の物語」 発表時 66 歳

イリヤス・ヴェネジス (1904-1973) 同 54 歳

アンゲロス・テルザキス (1907-1979) 同 51 歳

M. カラガツィス (1908-1960) 同 50 歳

レスボス島生まれのミリヴィリスは 1915 年に短編集「赤の物語 *Κόκκινες ιστορίες*」でデビュー、バルカン戦争や第一次大戦に従軍し、その体験から代表長編「墓の中の生 *Η ζωή εν τάφω*」(1924 年、第二版 1930 年)が生まれた。その後、第二、三長編の「金色の目の女教師 *Η δασκάλα με τα χρυσά μάτια*」(1933 年)、「ゴルゴンの聖女 *Η Παναγιά η Γοργόνα*」(1949 年)を発表。1958 年といえ最後の短編集「緋の本 *Το βυσινί βιβλίο*」(1959 年)以外の作品が全て世に出ている。

ヴェネジスは小アジア・アイヴァリ(レスボス島の対岸)の出身で、波乱の生涯を送った。小アジア大災厄でトルコの捕虜となり、一年あまり強制労働に従事したが、その経験が処女作「31328 号 *Το νόμμερο 31328*」(1931 年)に結実する。第一次大戦勃発時のレスボス島への避難や、移住先アテネでの苦難も作品(「アイオリスの地 *Αιολική Γη*」(1943 年)、「静けさ *Γαλήνη*」(1939 年))を書かせる原動力となった。1958 年までにはその他の長編「脱出 *Εξοδος*」(1950 年)、「大洋 *Ωκεανός*」(1956 年)、及び短編集七冊を発表している。

テルザキスはペロポネソスの古都ナフプリオンに生まれ、後にアテネに移り住んだ。処女長編「捕われし者たち *Δεσμώτες*」は 1932 年に、中世のフランク人支配に材を取った代表作「王妃イザボー *Η πριγκηπέσσα Ιζαμπώ*」は 1945 年に出版されている。「皇帝ミカエル *Αυτοκράτωρ Μιχαήλ*」(1936 年)、「テオフアノ *Θεοφανώ*」

(1956年) などビザンツ時代を舞台とした劇作でも知られる。

カラガツィスはアテネ生まれで、少年時をテッサリアで過ごし作品の舞台に使っている(例えば、処女長編「リャプキン大佐 *Ο συνταγματάρχης Λιάπκιν*」(1933年) や処女短編「ニーツァ夫人 *Η κυρία Νίτσα*」1928年)。四人のうち最年少だが、病気のため最も早く没した。多作家で 1958 年までに発表された長編だけで 14 作を数える。

3. 作品の構成

「四人の物語」の荒筋を一言で言えば、四十年代ドイツ・イタリア占領期に端を発するイタリア人将校(母はギリシャ人)とギリシャ人ダンサーの誤解と和解の愛情物語である。これにギリシャ抵抗組織リーダーの密告事件が絡む。

四作家が順番に一週間ずつ執筆を担当し、連載は二か月で終了した(1958年3月2日～4月26日)。ここでのミソは担当が二巡する点であり、一巡目の伏線を二巡目でどのように回収するのかが腕の見せ所になる⁷⁾。担当は以下の通り(章題は便宜上筆者が付したもの。)

- 第一章 ミリヴィリス「エリサヴェトの物語」
- 第二章 カラガツィス「アメンデオの物語」
- 第三章 テルザキス「悪役サヴァス登場」
- 第四章 ヴェネジス「エリサヴェトの決意」
- 第五章 ミリヴィリス「和解と対立」
- 第六章 カラガツィス「サヴァス殺し」
- 第七章 テルザキス「二人のヒロイン対決。犯人の告白」
- 第八章 ヴェネジス「逮捕。大団円」

4. ストーリーの構造分析

ここから作品のストーリーを紹介しつつ構造分析する(論文末の「ストーリーの流れ」参照)が、その際、特に以下の点に着目して読み解いて行きたい。

どのような人物を登場・退場させるのか？

どのような「過去の謎」を導入し、どう解決するのか？

どのように「未来の展開」を進めるのか？

これらの着目点はあくまで連載小説を展開させる技法にかかわるものである。作家性はもちろんこれだけにとどまるはずもないが、広範囲の読者を対象とし、二カ月にわたって読ませ続けるのが連載小説の身上である以上、こういった技法は必要条件であり、本作品が得た人気を解明するカギになると思われる。

4.1. 第一章 ミリヴィリス「エリサヴェトの物語」

作品は1950年代のバー「プチ・パレ」で幕を開ける。占領・内戦期の混乱も落ち着いた時代、アメリカ人を交えた一団が和やかに談笑しており、有名ダンサー「ネネラ」（本名エリサヴェト）の姿も見える。そこへイタリア人実業家アメンデオ・マンツィーニが夫人同伴で現れるが、「ネネラ」は突然彼を平手打ち。主人公の男女の過去にどのような因縁があったのか。また二人の関係は今後どうなっていくのか。ここで導入された「過去の謎」と「未来の展開」が作品全体の骨組を形成することになる。

物語を進めるためには、エリサヴェトとアメンデオそれぞれの過去を知る必要があるが、ミリヴィリスは前者の故事を語る。

時代は遡り第二次大戦前の1920年代、サロニコス湾のエギナ島を舞台にミリヴィリス得意の風俗小説 *ηθογραφία* 的な語りを展開する⁸⁾。マニ地方出身のアンドレアスは甥ザハリアスと風車小屋で石鹸を作り暮らしている⁹⁾。アンドレアスは可憐な娘メリシニを見染め結婚、幸福の絶頂にあるが、メリシニはザハリアスと関係を持ってしまう。憤激したアンドレアスにより、ザハリアスは釜に蹴落とされ、メリシニは壮絶な拷問の末に気が狂い、様々な男に身を任せる。やがて娘エリサヴェトが誕生、養母に育てられ、「ネネラ」の芸名でアテネの人気ダンサーに成長する。

続いて話は第二次大戦の占領期に入る。「ネネラ」ことエリサヴェトは密かに抵抗組織に協力する中で、イタリア軍人アメンデオと知り合う。占領軍人を最初エリサヴェトは信用しない。ところがこの才能溢れるダンサーに夢中のアメンデオは軍の機密情報を流し援助するようになる。

第一章は、抵抗組織の船長たちに危険が迫ることをアメンデオがエリサヴェトに伝言して終わる。この船長たちの運命は次回に語られるのだろうか。

4.2. 第二章 カラガツィス「アメンデオの物語」

エリサヴェトの過去が明らかになったところで、第二章のカラガツィスは男性主役アメンデオの生涯に焦点を当てる。抵抗組織の船長たちの運命は憐れに

も全く無視される。

占領下アテネ駐在のアメンデオ大尉は匿名の密告書を受け取る。曰く、「秘密抵抗組織のリーダーはフリストス・ミロナコスなる人物。隠れ家を検索せよ。証拠あり。」ダンサーに恋する青年からベカス警部風の探偵に変貌したアメンデオは二通の封書を発見する。ここでカラガツィスは多くの謎を一挙に提示する。誰が、なぜミロナコスを密告したのか。また封書の中身は何なのか？

時間は戦前へと遡行する。アメンデオは幼少期、イタリア商人の父とマニ出身の母とともに、ペロポネソスのパトラで暮らしていた。精神的にはギリシャ人であり、母の親族ミロナコスに憧れている。しかし、国籍故に差別を経験し、アイデンティティに悩む。アルバニア戦線に従軍し負傷、流血、「この血の半分が取り換えられたら…」と望む (p.60)。生物学的要因が人生の重要な決定要素とするカラガツィスらしい展開である¹⁰⁾。

占領期の物語が続く。密かにギリシャ人を援助するアメンデオ大尉は抵抗軍リーダー、ミロナコスへの警告をエリサヴェトに依頼。しかし、翌日占領軍司令部でポーリ将軍に尋問される。ミロナコスに情報がもれた、という密告電話があったらしい。アメンデオはリビア戦線へ強制派遣されるが、直前、逮捕されたミロナコスと再会する。エリサヴェトの方はその後アメンデオから連絡がなく、不安なまま待ち続ける。

ここで終戦を迎える。結局アメンデオはエリサヴェトの前から姿を消したまま。こうして、ミロナコス密告・逮捕の責任をめぐって、アメンデオとエリサヴェト間の誤解が始まる。

終戦から十年近くが過ぎた 1953 年（作品冒頭の時間に近づいている）。新聞「プロピレア」の発行人アンディパスは、イタリア在住の知人アメンデオから手紙を受け取り、ミロナコス将軍と会って裏切りの真相を探るよう依頼される。しかし、将軍は既に死亡。裏切ったのはある女（エリサヴェトか？）という噂が流れている。アンディパスが秘書フロソを連れてアメンデオを出迎えるところで次章に続く。

密告によってミロナコスは逮捕されるが、アメンデオと面会し、両者の対決は解決している。これに反して、ミロナコス密告の謎が大きく浮かび上がって来る。カラガツィスの導入した「過去の謎」は大きい。

4.3. 第三章 テルザキス「悪役サヴァス登場」

前章で新聞発行人アンディパスの助手に過ぎなかったフロソが、語りの視点

を担い物語の前面に現われて来る。第五章ではさらに大きく変貌することになるのだが、ここではまだ、華やかな上流階級や映画の世界に憧れ、語学に熱中する上昇志向の若い女性にすぎない。

本章で重要なのは、第三の主人公と言っていい怪人物、ジゴロのサヴァスの登場である。平手打ち事件の場にたまたま居合わせ、愛人のフロソを思いのままに操り、アメンデオの夫人イーザに接近する。その目的はまだはっきりしないが、ただの金銭や恋愛がらみではないらしい。実はサヴァスの母はミロナコス将軍の妹であり、サヴァスは伯父である将軍の書類の中に何かを発見し持ち出している。

ここで、時間が三度^{みたび}占領期に遡る。エリサヴェトはサヴァスを訪れ、ミロナコスへの警告を伝えてくれるよう依頼する（第二章を受けている）が、サヴァスは拒否。仕方なくエリサヴェトが単独で訪問した直後にミロナコスは逮捕される。その後、アメンデオは姿を消すが（第二章にあるように、実はイタリア占領軍総司令官の温情で配置換え）、戦後実業家としてミラノに在住、逮捕はエリサヴェトの密告のせいであると信じ恨んでいるらしい。エリサヴェトは手紙を出すも突っ返される。かくして先日アテネ訪問の際、素知らぬ顔で挨拶したアメンデオを思わず平手打ちしたことがわかり、ミリヴィリスが冒頭に提示した、二人の因縁という謎はここで明らかになる。

サヴァスはエリサヴェトに向かって、ミロナコスをイタリア軍に密告したのは自分であると認める。密告者の謎もここで解決。（アメンデオも別のルートからサヴァス犯人説の確証を得ている。）サヴァスはエリサヴェトに関係を迫るが、毅然とした態度で拒否され、今後は敵となると告げて立ち去る。こうしてエリサヴェト対サヴァスの対立の図式が完成し、「将来の展開」への興味になる。また、サヴァスが故ミロナコス将軍の書類に発見した内容や、イーザ夫人に付きまとう目的も、今後の話を牽引していく。

4.4. 第四章 ヴェネジス「エリサヴェトの決意」

両親を知らないエリサヴェトは自らの生い立ちに疑問を持ち、故郷エギナ島へ出発する。その直前サヴァスから、ミロナコス将軍は実はアメンデオの父親であるという卑劣な暴露電話がかかるのだが（実はこの親子関係がサヴァスの発見）、将軍密告事件もエリサヴェトとアメンデオとの誤解も、この章ではさしたる進展を見ない。占領期にフラッシュバックすることもない。ヴェネジスが描こうとするのは、自らの過去に対峙するエリサヴェトの姿である。

島の港は群集でごった返しており、日々の糧を稼ぐ物売りたちの描写が差し挟まれる。庶民生活の情景が入ることで、これまでの章になかった空間の広がりを読者の眼前に現れる。

エリサヴェトは船内で或る老婆や老人と知り合う。老人は、かつてティノス島で敵軍に急襲された停泊中の戦艦がイルカと化して魚雷を跳ね返し、白い鳩に変じた、という御伽話（1940年ギリシャ・イタリア戦争の発端となったイタリア軍によるエリ号撃沈事件の伝説化）を語る。名もなき老人はここにだけ登場し、エリサヴェトに民衆の想像力と生命力の逞しさを感嘆させ、過去へ対峙する勇気を与える役割を担っている。

老婆の方も名前は語られないのだが、物語への関わりがさらに深い。エリサヴェトの両親がかつて石鹼を作っていた風車小屋に偶然住んでいるのである。小屋でエリサヴェトは老婆から両親のおぞましい故事を聞く。ただ、父親は狂乱のアンドレアスではないことが慰めになり、形見の聖画をもらって風車小屋を去る。アメンデオに手紙を書き、自分の過去に直面する決意ができたと知らせる。署名は「エリサヴェト」。虚飾の世界の「ネネラ」とは決別する。島のアフェア神殿で、人間の過酷な運命に思いを馳せ、荘厳な自然の美の中で浄化を感じる。

この後、大戦中（1943年）の逸話が挿入される。イタリア人捕虜二千名と石油を載せたドイツ軍輸送船をイギリス軍潜水艦がエギナ島沖合いで撃沈。翌春石油缶を回収する際潜水夫たちは、船倉に目を開け立ったままの二千人の遺体の間を通らなければならなかった。現在はイタリアの会社がこの難破船解体を請け負い、技術者を派遣している。責任者はアメンデオであり、ここで二人の関係に話が戻される。

エリサヴェトとアメンデオの誤解の背景はすべて明らかになり、エリサヴェトの自分探しも完結した。今後は、二人の誤解の解消、そして、逞しくなったエリサヴェトと悪役サヴァスの対決が展開することになる。

4.5. 第五章 ミリヴィリス「和解と対立」

この章から二巡目が始まる。他の作家の設定を継続しつつ、自らが埋め込んだ布石を回収する機会は一度しかない。

ミリヴィリスは第一章のエギナ島を再び舞台に選ぶ。アメンデオとエリサヴェトは黄昏時のアフェア神殿でココロギの声に耳を傾けながら、心穏やかに互いの事情を語りあう。抒情的な自然描写もまたこの作家が得意とするところで

ある¹¹⁾。二人の誤解は氷解し、恋愛感情が芽生える。(前回ヴェネジスが丹念に描いた芸名との決別は忘れられ、再び「ネネラ」に戻っている¹²⁾。)

宿敵サヴァスはアメンデオ夫人イーザにつきまとい、二人は(読者サービスを兼ねて)お上りさん宜しく著名な観光地(ロシア教会、国立公園、ザッピオン、オリンピア神殿、リカヴィトス)を廻る。サヴァスは欺瞞の手管を駆使して夫に対するイーザの疑心暗鬼を引き出し、パレオ・ファリロの隠れ家で逢い引きする二人の姿を見させる。こうして絶望したイーザをサヴァスは自分の部屋へ連れ込んで凌辱した後追い出し、「プチ・パレ」で妻を待つアメンデオに侮蔑の電話をかける。夫妻の仲は決裂、夫人はイタリアへ帰る。サヴァスの目的は、つまりはアメンデオへの復讐であったことが分かる。その後もサヴァスの執拗な復讐が続き、アメンデオは激昂し対決を誓う。

この章でアメンデオとエリサヴェトの誤解はすべて氷解し和解に達する。第二章の占領下の裏切りの犯人もサヴァスであることが明らかになり、「過去の謎」は、第二章の封書の内容を除き、ほぼ解決。こうして、以降はアメンデオ・エリサヴェト対サヴァスの戦いという未来展開型のストーリーになっていく。

4.6. 第六章 カラガツィス「サヴァス殺し」

前章のアメンデオの激昂を受けて、フロイトの精神分析用語の解説でこの章は始まる。曰く、人は時には脅しの言葉を口にし、理性を鈍らせ「超自我」の抑制力をなくしてしまう。そんな時、細胞に内在する先祖伝来の「自我」が現れ、獣人や洞穴人のように殺人へと突き進む。しかし、脅しが言葉になった後、「超自我」が再び現れ自己を抑制し、通常は実行されない。だが、決意が強すぎる場合、もはや運命には抗えない場合がある。

つまり、アメンデオは狂乱しかかった精神を抑制できるのか、それとも実行に移してしまうのか、というカラガツィス独特の饒舌な前口上である。

アメンデオの過激な言葉を恐れ、今後二人でイタリアで暮らすならサヴァスなど気にする必要がない、とエリサヴェトは宥める。しかし、アメンデオの激昂は収まらない。ミロナコスの子として故地マニとのつながりが切れないことを実感し、エリサヴェトを愛しているが、サヴァスによる妻イーザへの侮辱も、父を密告したことも許せない。(第二章で発見された封書はアメンデオの母に宛てた將軍のラブレターだったことが明かされる。が、アメンデオと將軍の父子関係は第四章で暴露されており、この謎の解明は大した意味を持たない。)

一方、サヴァスはフロソに編集長アンディパスの捜査動向を探らせている。

この辺から、サヴァスの心理描写が増えてくるのだが、そのため、テルザキスによって、闇社会に巣食う得体の知れぬ存在として導入されたサヴァスが、意外に虚勢を張るだけの小心者と化していく。

アンディパスはサヴァスを新聞社へ呼び出し、収集したミロナコス将軍密告事件の証拠資料を突き付けて、アメンデオから手を引くように言う。二人の腹の探りあいの会話が面白い。自分は許せても、マニ人（将軍）を裏切ったマニ人（サヴァス）をマニ人（アメンデオ）は許さないだろう、とアンディパスが言い放つ最中に、知恵遅れの青年ヤニスがカフェニオのコーヒーを届けに闖入、話に聞き入り自分もマニ人であると高揚して叫ぶ（この突発的な挿話は何か意味がありそうである。）結局サヴァスが折れ、エリサヴェトに赦しを請うことを受け入れる。

場面は一転して、検事局のオフィス。検事たちがアメンデオとエリサヴェトの証言を取っている。何とサヴァスが射殺されたい。ストーリーは急展開し、突如ミステリ調になる。アメンデオは匿名電話（実はフロソ）によりエリサヴェトとサヴァスの密会を教えられ、ケサリアニの森へ向かい、エリサヴェトに襲いかかるサヴァスを見つけ発砲、追いかけて射殺した。しかし、監察医は致命傷がアメンデオ以外の弾丸によるものと結論付ける。本格ミステリとは異なり（A.バークリー「第二の銃声」やJ.D.カー「第三の銃弾」では銃声、銃弾をめぐって事件が錯綜し続ける）、アメンデオは簡単に疑惑外に逃れる。

主人公二人の和解が成立し、敵役との対立軸が浮き彫りになった第五章を受け、第六章のカラガツィスはストーリーを強引に急展開させていく。大胆にも第三の主人公サヴァスを殺し、その謎で読者を引っ張っていかうとするのである。その際続く二人の作家に向けて明らか過ぎる伏線を残す。誰が見ても「プロピレア」社の場面で突如現われたヤニス青年が怪しい。今後は、これ見よがしの容疑者をテルザキスとヴェネジスがどう扱うのかが焦点になってくる。

4.7. 第七章 テルザキス「二人のヒロイン対決。犯人の告白」

前章の展開にテルザキスは驚いてしまったのではないだろうか。第三章で自らが丹精込めて描きこんだ陰影ある人物がカラガツィスに殺されてしまったのである。そこでテルザキスはその代役としたのがフロソである。愛人サヴァスの手先としてこそこそと内偵していた脇役が、内面的にも行動面でも逞しさを増し、第四の主人公に成長してくる。

ここでも第三章同様フロソの視点で語られるが、もはや主人公の視点である。

フロソはサヴァスを亡くし虚脱感に沈む。周囲はサヴァスとの仲を承知しているが話題を避けている。記者から、アメンデオ犯人説には疑いありと聞きフロソは希望を持つ。他に真犯人がいるなら、サヴァズ殺しは自分の密告電話のせいではなくなるからだ。フロソの憂愁は愛人を亡くしたことよりも、殺人への自責の念から来ているらしい。十日間が過ぎても事件の捜査は進まず、人々の噂から消え始めるが、フロソはサヴァスの墓へ日参し、彼の写真入りブローチを作り胸に留める。

事件により、故サヴァスの占領下での悪行（ことに將軍の密告）が明るみに出て、母ペトリス夫人は事件から距離を置く（元来母子の関係は淡白であったことが第三章で語られている。）そこへフロソが接近、無償で夫人の世話を申し出る。フロソの心境は複雑である。アメンデオの釈放を望む気持ち（サヴァス殺しに自分の責任がなくなるため）と望まない気持ち（恋人が釈放されてエリサヴェトが幸福になるため）が同居している。結果として、最も憎むべき相手としてエリサヴェトが浮かび上がる。エリサヴェトのほうはアメンデオ釈放のため弁護士や政治家の間を奔走しているが、本人は殺したと言い張っている。

疑惑の固まりのようなヤニスの怪しい行状が何度か挿入される。エリサヴェトを見かけては失神し、夜間彼女を尾行、半身不随の父のカフェニオの手伝いもせず、映画館に入り浸ってミステリ映画に興じている。殺人事件の伏線を回収する準備が徐々に進む。

フロソはエリサヴェトの家を訪ね、自らサヴァスの情婦と名乗り対決。ここは見せ場の一つである。「二人は薄暗がりになり、黙って息を殺していた…突然奇妙な悪寒がエリサヴェトの背筋を走り、立ち上がり後ずさった。『この女（フロソ）がアメンデオに電話してケサリアニへ行かせ…殺しを行わせた。』」（p.301）

アメンデオの一撃が致命傷になった、との警察発表を聞き、フロソは落胆し、ペトリス夫人を訪問するのも躊躇うようになる。ある夜、やりきれずバーで酔って雨の中を帰宅するフロソをヤニスが待ち受け、罪を告白する。カラガツィスが突然第六章で撒いたミステリの種を、テルザキスは犯人の告白によりあっさりと解決してしまう。裏切りを許さないマニ人の掟という動機は、50年代後半の読者にとってどの程度リアリティーがあったのだろうか（しかもこの犯人の場合関係者と親族関係にもない）¹³⁾。とにかく、テルザキスはカラガツィスの意図に沿って伏線を回収するほかはなかつただろう。

残された興味はフロソの取るべき道である。もはやかつての上昇志向の秘書、あるいはサヴァスの傀儡ではなく、決断力と包容力に溢れるフロソは、憐れな

犯罪者ヤニスはどう扱うのだろうか。

4.8. 第八章 ヴェネジス「逮捕。大団円」

最終回となり、伏線を回収しつつ、さまざまな対立を解決する最も困難な役割はヴェネジスの肩にかかっている。

まず、前回の最後で提出された問題、フロソがヤニスをいかに扱うべきかであるが、処罰を覚悟するヤニスに対し、誰にも何も話さず家に帰り翌日仕事に出るように、とフロソは言い含める。翌日ペトリス夫人に会ったフロソが真相を告げると、夫人は驚愕し警察に行くべきだと答え、さらにフロソとの交際の打ち切りを宣言する。

犯行現場で警察の検証が行われる。百人以上の群集が取り巻く中、アメンデオとエリサヴェトは状況を再現する。警察は現場に近づくヤニスを不意打ちで逮捕し自白を引き出す。(ヴェネジスはパズラー型ミステリには興味がないらしい。証拠も反駁もなくヤニスは簡単に「落ちる」。) 警察は偽の発表で真犯人をおびき出したのだった。アテネ中が事件解決の噂に沸く。

この後は、様々な人物間の対立の解消が残されているが、ヴェネジスは几帳面にもひとつずつ和解させていく。

まず、エリサヴェトとアメンデオ夫人イーザ。イーザの最も知りたがっているのはアメンデオの犯行理由(妻イーザのため?)であるが、殺害犯人は別人であると知り、ひとまず和解する。次にイーザと夫アメンデオ。アテネ郊外のキフィシアで静養する夫は妻に全ての事情を打ち明け、二人は正式に別れることになる。被告ヤニスの運命だが、裁判でサヴァスの過去の悪事が晒され、重い罪には問われない。ヤニスの老母はアテネ北のガラツィの貧しい小屋で息子を心配しマニの挽歌を吟んでいたが、正気を取り戻す(この老母の存在もヴェネジスがこの章で突然挿入。) サヴァスの母ペトリス夫人は悲嘆に暮れたままだが、フロソが傍らで支える。

最後の舞台は再びエギナ島。自らのアイデンティティーに悩んだ主人公アメンデオ・マンツィーニは本名パンデリス・フリストゥ・ミロナコスの名乗る決心をし、カトリックから正教に改宗、真の故郷ギリシャに戻る。傍らのエリサヴェトの腹には二人の子供が宿っている。大団円。

5. 物語の牽引要素

四作家が、どのような人物を登場・退場させ、「過去の謎」「未来の展開」「解

明・解決」を絡めながらいかに物語を紡ぎ上げているのかを、もう一度まとめて見てみよう。

ミリヴィリスの第一章で、主人公エリサヴェトとアメンデオが登場する。エリサヴェトの誕生と生涯が語られるが、彼女がアメンデオを恨む理由は不明である。この「過去の謎」と二人の今後の関係という「未来への展開」とが作品全体の背骨を形成する。

カラガツィスの第二章の主人公はアメンデオであり、その幼年時代から占領軍将校までの生涯が語られる。大戦時のミロナコス将軍密告事件が話の中心に浮かび上がり、二つ目の「過去の謎」として物語の牽引力となる。アメンデオ大尉と将軍の対立が挿入されるが、これは同一章の中で和解が成立する。

テルザキスの第三章では、第三の主人公である敵役サヴァスが姿を現わす。前章でわずかに言及された秘書フロソの人となりも語られる。冒頭からの謎だったエリサヴェトとアメンデオの誤解の背景と密告事件の真相の一部が明らかにされる。

一方、サヴァスが話の軸となり、叔父である故ミロナコス将軍の書類中に発見した秘密、アメンデオ夫人イーザに接近する目的、エリサヴェトへの敵対関係などがその後の興味を引っ張って行く。

ヴェネジスの第四章は、ここだけで完結した世界を形成する。自らの生い立ちを知らないエリサヴェトは故郷エギナ島を訪れ、自分の過去に向き合う決意をかためる。島の老婆、船上の老人、「ヤニスの館（かつてのカポディストリアス大統領の住まい）」の管理人マルコス老は、名を持たない港の群集や沖合に眠る千体の遺体同様、この章にのみ現れ、占領下での将軍密告事件にも、大都市アテネのエリサヴェト対サヴァス抗争にも関わりがない。

第五章から二巡目に入り、物語は徐々に収束方向に向かっていく。最大の「過去の謎」は、平手打ちに始まるエリサヴェトとアメンデオ間の誤解であるが、実は占領期の将軍密告事件に根ざしており、密告者は将軍の甥サヴァスであることが第三章から第五章にかけて明らかになる。そこで今後の興味の重心は、登場人物たちがどういう経過で、あるいは和解し、あるいは破局に至るのかという「未来の展開」に移る。

第五章担当のミリヴィリスは物語を整理し一気に収束に向かわせる。新たな人物は一切登場させず、エギナ島の荘厳な自然の中でエリサヴェトとアメンデオの誤解を解き、愛情を復活させる。一方でエリサヴェト・アメンデオ対サヴァスの対立の構図も確立し、安易な妥協など不可能な点にまで緊張が高まる。

続く第六章では物語作家カラガツィスの個性が浮かび上がる。収束方向に向かう他の作家を尻目に、犯罪事件を突如ストーリーに組み込み、攪乱のほうにうっちゃるのである。場面の必要上新しい登場人物（警察検察関係者）も多い。この謎が物語の新たな牽引力を産むが、同時に後の二章でその解明が必要になって来る。

第七章のテルザキスは新しい人物を登場させる余裕もなく、この二重の課題に取り組む。まず、カラガツィスが残した手掛かりを巧く汲み取り、サヴァス殺しの犯人に告白させる。告白を受けたフロソがこの人物をどう処するかは、次のヴェネジスに委ねられる。しかし、二つ目の課題の方がテルザキスは描きたかっただろう。女主人公エリサヴェトとフロソの対決である。第三章で自らが導入したサヴァスを殺されてしまった分、フロソを主要人物として成長させ、（和解には至らないものの）主人公と渡りあう準主人公に仕立て上げている。

ヴェネジスの最終章では、犯人の裁判が結審、殺害事件が収束するとともに、様々な人物の対立関係が収束され、物語が終了する。ここでもヤニスの老母を突然登場させ、知的な推理遊戯に留まらない独自の物語世界を作り上げる。

ミリヴィリス、テルザキス、ヴェネジスが収束への志向を見せるの対し、カラガツィスは攪乱を楽しんでいるように見える。企画したのがヤニス・マリスだからというわけでもなかろうが、カラガツィスのミステリ小説への傾斜は顕著である。シャーロック・ホームズへの言及や検事局での討議といった表面的な要素にとどまらず、物語が中盤で一段落したところへ新たな事件を起こし、読者を引っ張って行く手法は欧米の三十年代黄金期の長編ミステリを思い起こさせる。カラガツィスのこの攪拌が「四人の物語」の牽引力になっているのは確かである。

6. 四人の作家的特質

読ませる技巧という点からみた場合、カラガツィスの職人芸は目を引く¹⁴⁾。話を巧みに攪拌する手際は、既に処女長編「リャプキン大佐」で見てとれる。亡命ロシア人の主人公がギリシャの地に少しづつ馴染んでいくと思われた物語の中盤、決闘で相手を殺してから歯車が狂い始め、終盤で突如過去の犯罪が暴かれるや破滅へと雪崩れ込んでいくのである。

しかしながら、作家が小説を世に問う目的はリーダビリティに富む作品の提供だけではあるまい。統一性のないリレー小説から漏れ聞こえてくる不協和音にこそ、各作家の特質が浮かび上がる¹⁵⁾。

ミリヴィリスには風俗小説の尻尾が強く残っている。アテネの高級バーでストーリーの幕を開けながら、すぐに20年代のエギナ島の寒村生活を語り始める。自己を律し切れないアンドレアスの凄まじい狂気は、同僚に虐げられた主人公が最後に痛烈な一撃を返す「憐れなもの *To Mίζερο*」(「赤の物語」所収)や、自尊心ゆえに父親や教会を含めたあらゆる権威に抵抗し滅んでいく「ヴァシリス・アルヴァニティス *Ο Βασίλης ο Αρβανίτης*」(1943)を思い出させる。他方、エギナの荘厳な自然描写は、出来事が起きず情景をスケッチしただけの「ある風景 *Τοπίο*」(「緑の本 *Το πράσινο βιβλίο*」(1935)所収)や「サロニコス湾の夜 *Η νύχτα του Σαρωνικού*」(「赤の本 *Το κόκκινο βιβλίο*」(1952)所収)を書いたこの作家らしい¹⁶⁾。

テルザキスは小市民生活 *μικροαστική ζωή* を描いた作品から出発した¹⁷⁾。上昇志向の秘書フロソや貧しい両親を抱え夢想の世界に入り浸るヤニスの人物像にその片鱗が感じられるが、「四人の物語」で印象的なのは、二人の女主人公の対話場面に込められた心理の駆け引きの妙である。カラガツィスも悪役サヴァスと探偵役アンディパスに「プロピレア」社で対決させているが、テーマは將軍密告事件を巡る知的な論争である。対してテルザキスは夜闇迫る館を舞台に、各々の存在を賭けた鬼気迫る対話をさせる。劇作「皇帝ミカエル」と「テオフアノ」の中で、権力、愛情、人生に執着するビザンツ皇妃ゾエとテオフアノを夫のミカエル帝やニケフォロス帝たちと対峙させ、その炎のような情念で皇帝たちを完全に圧倒した対話劇の迫力がここでも見られる。

語り物職人カラガツィスの対極にあるのはヴェネジスの骨太の物語だろう。その視点はより広い社会へと照射され、主人公たちにのみスポットライトの当たる舞台劇から、背景までを詳細に照らし出す映画の画面に切り替わったような印象を受ける。風車小屋に住む老婆、イルカに姿を変えた船の御伽話を語る老人、「ヤニスの館」の管理人、沈没船に残された夥しい溺死体、マニの挽歌を歌うヤニスの老母は、將軍密告事件や主人公と悪役との戦いなどとは全く離れた静かな世界の住人である¹⁸⁾。

リレー小説という企画にもっとも懐疑的であったのは、あるいはヴェネジスであったかもしれない。記者たちは事件の仮説を検討をしながら「空想だ空想だ、まるで『四人の物語』のように話がこんがらがっている！ (pp.318-9)」と自ら揶揄し、大詰めで弁士風に「親愛なる読者へ、『四人の物語』も結末を迎えます (p.343)」などとやって、作品の出来を自嘲しているように見える。

7. 結論

「四人の物語」は企画そのものからして、完結した作品としては評価できず、既に自己を確立した作家たちの実験・遊戯ということになる。四人とも 1979 年の書籍出版を見ることなく亡くなっており、自分の主著とは見ていなかっただろう。しかし、まさにそのまぢまぢたるがゆえに、それぞれの作家の作業部屋を覗くことができ、物語を紡ぐ技量、さらには、そこに収まり切らない独自の世界観を再認識できる点で、意味のある試みと言えるのではなかろうか。

注

- 1) 三十年代散文作家は、リアリズムを重視しながらも伝統への畏敬を保持する「アイオリス派」、都市のリアリズムを描いたグループ（テルザキスとカラガツィスはここに属する）、個人の心理描写に深化していった「テサロニキ派」の三グループに分けられる（Beaton, 1994:13ff.）。
- 2) 1958 年までにヤニス・マリスは「コロナキの犯罪」「楽屋の犯罪」「十三番目の乗客」などの代表作を含む 10 作品以上を発表し、ミステリ作家としての名声を確立していた。
- 3) 連載開始一カ月ほど前の 1958 年 2 月 16 日、「アクロポリス」紙面に宣伝をかねてリレー形式のルールが紹介された（Φιλίππου, 1998）。
- 4) 編集者の前書き（p.9）。一等賞は「マニの血 *Μανιάτικο αίμα*」だったらしい（Φιλίππου, 1998）。
- 5) 共同脚本は現代作家のガラティア・サランディ *Γαλάτεια Σαράντη*（1920 年パトラ生まれだが、短編「別れ *Αποχαιρετισμός*」（1959 年）、「終わり *Το τέλος*」（1972 年）ではマニの土地と風習に執着する人々の姿を描く。）
- 6) このようなリレー形式の試みはほとんどないらしい。1987 年に雑誌「*Το τέταρτο*」に六人の作家による「*Αθέατη όψη*」なるリレー小説が発表されたが、よい出来ではなく書籍化もされなかった。しかし 1998 年「*Τα Νέα*」紙に掲載されたアンドレアス・スルニスなど四人の作家による「四人の遊戯 *Παιχνίδι των τεσσάρων*」は好評でカスタニオティス社から書籍出版もされた（Φιλίππου, 1998, Γιατρομανωλάκης, 2009）。
- 7) モデルとしてヤニス・マリスの念頭にあった欧米のリレー・ミステリ作品では、担当は（連続はしても）一巡するだけである（A.クリスティ他「漂う提督」、J.D.カー他「殺意の浜辺」など）。
- 8) 風俗小説の語り口はミリヴィリスの特徴の一つ（Σαχίνης, 1978:59, Beaton 1994:136）。
- 9) マニ *Μάνη* はペロポネソス半島南端のメセニア湾とラコニア湾に挟まれた地方（南に突き出た三つの岬のうち真ん中）。トルコ支配期にも自治を保ち、独立戦争で勇名を馳せ、カポディストリアス初代大統領を暗殺したマヴロミハリス家を有力者として、ギリシャ新王国の支配体制にも容易に組み込まれなかった。復讐の習慣と挽歌で知られる。この

- 二つの特色が「四人の物語」でも利用されている。
- 10) 「彼ら(主人公たち)は巨大な生物学的力に対し、むなしく抵抗する」(Beaton, 1994:145)。処女長編「リャプキン大佐」、第二長編「大いなるキマイラ」の主人公たちは並外れた能力・魅力に恵まれながら、細胞に刻まれた生物学的衝動によって破滅する。
 - 11) ミリヴィリスの自然描写の妙は視覚・触覚に訴えて来る。人物よりも物の描写の方が筆力がある (Σαχίνης, 1978:60)。
 - 12) ヒロインの名前の揺れは Καπανδρέου (2014) も指摘する。
 - 13) マニ出身で故郷を舞台にした作品を発表した作家にヤニス・グデリス Γιάννης Γουδέλης (1919-1999) がいる。(出版社ディフロスを設立しカザンザキスの作品を出版してもいる。) その短編「妹の目 Τα μάτια της δίδυμης」は、深く愛する双子の妹を軽薄な色男に凌辱されてしまった兄がアルバニア戦線から戻り、悲嘆の末洞穴で妹を殺すという話である。物語の時代は 1940 年頃だが、死によっても守るべき名誉の前提には親族(しかも双子の兄妹) という血の繋がりがあある。
(Χάρης Πάτσης, Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας, Τομ.5, σσ.608-610)。
 - 14) 「カラガツィスは最終頁まで読者を繋ぎとめる。読者の興味をひく術を知っており、... 物語を楽しませる術を知っているのだ」(Σαχίνης, 1978:95)。
 - 15) 推理作家でもあるフィリポス・フィリプは四人の特質が顕著に表れた場面を指摘する：カラガツィスによる占領下の裏切り者、ヴェネジスによる島の庶民群像、テルザキスによる野心的な若者像、ミリヴィリスによる、人間に律しきれない戦争(Φιλίππου, 1998)。
 - 16) サヒニスミリヴィリスに特徴的な三つの素材として「戦争」「風刺」「抒情性(自然礼賛)」を挙げる (Σαχίνης, 1978:69)。
 - 17) 大都市周辺の町角やタベルナにたむろし、どうあがいても悲運から抜け出せない小市民の悲惨な生活を描いたとされる (Σαχίνης, 1978:103)。
 - 18) ヴェネジス作品では、処女作を除き、現実の直接的出来事と伝説・御伽話が背中合わせに語られると言う (Σαχίνης, 1978:79)。

参考文献

- Γιατρομανωλάκης, Γιώργης (2009/7/19) "Το μυθιστόρημα των «16»".
(<http://www.tovima.gr/opinions/article/?aid=279346>)
- Καπανδρέου, Ανδρέας (2014/11/24) "Το μυθιστόρημα των τεσσάρων: το κοινό μυθιστόρημα των Βενέζη, Καραγάτση, Μυριβήλη και Τερζάκη".
(http://andreaskandreou.blogspot.tw/2014/11/blog-post_24.html)
- Σαχίνης, Απόστολος (1967 / 1978²) *Πεζόγραφοι του καιρού μας*. Εστία.
- Φιλίππου, Φίλιππος (1998/3/17) "Σκυταλοδρομίες", *ΤΟ ΒΗΜΑ*, βιβλία + ιδέες.
(<http://www.tovima.gr/books-ideas/article/?aid=99450>)
- Beaton, Roderick (1994) *An Introduction to Modern Greek Literature*, Clarendon Press.

「四人の物語」ストーリーの流れ

章	担当作家	過去の謎	未来の展開	解明・解決	新たな登場人物
1	ミリヴィリス 「エリサヴェートの物語」	エリサヴェト、アメンデオを平手打ち（二人の間の誤解）	エリサヴェトとアメンデオの関係 抵抗組織の船長の運命		エリサヴェト・マニアティ（ダンサー、芸名ネネラ、マニ人） アメンデオ・マンツィーニ（イタリア人実業家、占領軍大尉） イーザ（アメンデオの妻、イタリア人） カテリナ（抵抗組織リーダー） アンドレアス（エリサヴェトの父、マニ人） メリシニ（その妻） ザハリアス（アンドレアスの甥） エリサヴェトの養母
2	カラガツィス 「アメンデオの物語」	ミロナコス密告者の正体 発見された封書の内容	アメンデオとミロナコスの対立	アメンデオとミロナコスの和解【←2】	ジャコモ（アメンデオの父、イタリア人） ポティツィア（アメンデオの母、マニ人） フリストス・ミロナコス将軍（ギリシャ抵抗組織リーダー、マニ人） ポーリ将軍（イタリア占領軍司令官） アンディパス（「プロピレア」紙発行人） フロソ・マッテアキ（その秘書）
3	テルザキス 「悪役サヴァス登場」	サヴァスの発見内容	サヴァスのイーザへの接近 サヴァス対エリサヴェトの対立	ミロナコス密告事件の部分的解決【←2】 エリサヴェトとアメンデオ誤解の背景【←1】	サヴァス・ペトリス（ジゴロ、ミロナコスの甥） ペトリス夫人（その母）
4	ヴェネジス 「エリサヴェトの決意」		エリサヴェトの自分探し エリサヴェトとアメンデオの再会	アメンデオとミロナコスの親子関係（＝サヴァスの発見内容）【←3】 エリサヴェト、過去に向き合う決心【←1】	ヨアナ（エリサヴェトの生徒） エギナの老婆 船上の老人 マルコス老（エギナ島の「ヤニスの館」の管理人）
5	ミリヴィリス 「和解と対立」		エリサヴェト&アメンデオ対サヴァスの対立	密告者の正体【←2】 エリサヴェトとアメンデオの和解【←1】	
6	カラガツィス 「サヴァス殺し」	サヴァス殺し	アンディパスとサヴァスの対決	発見された封書の内容【←2】	ババユリス（ゴシップ雑誌出版者） ヤノプロスとフリアラキス（警察記者） タフツィジス（検事） カプソニス（監察医） ヤニス（マニ人、カフェニオ店長の息子） マスラキスとピルピリス（検事配下の警部補）
7	テルザキス 「二人のヒロイン対決。犯人の告白」		エリサヴェトとフロソの対決 サヴァス殺害犯の運命	サヴァス殺しの真相、犯人の告白【←6】	
8	ヴェネジス 「逮捕。大団円」			サヴァス殺害犯逮捕、裁判【←6】 故サヴァスの断罪【←3, 5, 6】 登場人物たちの和解【←1~7】	ヴォルテリス（弁護士） ヤニスの老母

【←番号】は「過去の謎」「未来の展開」が最初に導入された章の番号。